

# 景観フォーラム

日本景観フォーラム会報 5号 (2012年4月1日)



## 巻頭言

東日本大震災から1年が過ぎ、やっと復興の具体的な動きが見えてきたようです。瓦礫の処理がまだまだ進まない中、復興計画は遅々として進みません。以前あったものをそのまま再建するという事もありうる選択肢かもしれませんが、津波に襲われた地域は今後また来るかもしれない津波災害に対して安全第一のまちづくりが求められるでしょう。しかし、安全第一と言いながらもコミュニティから生まれる豊かな賑わいというものを忘れてはなりません。まさにコミュニティの誰もがほっと出来るような豊かな生甲斐のある景観を享受できるまちづくりが望まれるのではないでしょ

うか。

さて、新年度を迎え、当団体では今年度中に「景観まちづくり」を実施する際に、具体的にどのように活動したらよいかに対応する“フレームワーク”の作成を計画しております。このフレームワークを用いて実際の景観まちづくりのためのワークショップを実施し、“景観から考えるまちづくり”の実践に資するためのツールにしたいと考えております。景観を考えることがコミュニティを考えることにつながり、豊かな景観と豊かなコミュニティの創造に貢献したいと念じております。会員皆様方の積極的なご参加をお待ちしております。(齊藤全彦)

## 予 定

### ◇定例景観セミナー◇

4月25日「歴史と景観」  
神奈川県立歴史博物館学芸部長

5月19日「文学と景観」  
(財) 神奈川近代文学館学芸員

6月13日「ナショナルトラストと景観」  
(社) 日本ナショナルトラスト協会職員

7月18日「環境問題と景観」  
駿河台大学経済学部准教授

会場 JICA地球ひろば(渋谷区広尾)

※5月景観セミナーの会場のみ神奈川近代文学館)

# 地域コミュニティと景観の再生

東海林伸篤 世田谷区職員（一級建築士）



かつての日本には、その土地の素材や構法や慣習に基づき形作られてきた、美しい景観（棚田、集落、家並みなど）がありました。いわば“風土（地理的自然条件）の制約から生まれる美”といえるものであったと思います。

しかし、産業や流通の発達に伴い、多くの人々がその土地の風土から切り離された生活を志向するようになってから、こうした古きよき日本の原風景は失われていきました。



被災した集落と変わらず残る自然の景観  
(2011年7月、陸前高田)

つつありますが、この行為には、“地域のつながり”や“風土を生かすしくみ”を取り戻すきっかけが内在されていると考えます。

例えば、地元の米を食べれば近郊の田園風景が残り雇用が確保される。葦のすだれを使えば、湖の水質が改善され美しい水辺景観が再生される。自宅の建設に近郊の山の木々を使えば、森林が保全され土砂の流出がとまり、雇用が生まれ、さらにはその土地の構法の活用により集落としての全体性が生まれる・・・などなど。

単に価格の安さやデザインや目に見える形のサービスだけではない、商品や人間の行為が環境の全体性（地域の多様な循環）に及ぼす影響も考慮にいった価値観が尊重されれば、地域社会そして景観は徐々によりよくなる変化していくものと考えます。

こうした地域環境の最適価値を踏まえ、人々が商品やサービスを適切に認識し選び取っていけるような、地域社会（コミュニティ）単位のきめ細かな総合的仕組みづくりが、必要であると考えます。

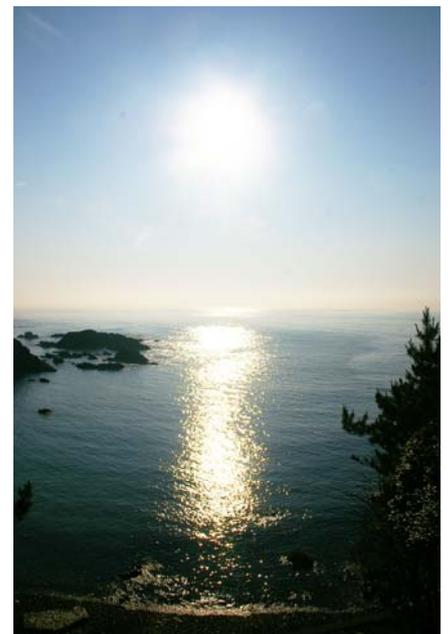
昨今、環境の持続可能性（原発から自然エネルギーへの脱却など）や食物の安全・安心の観点から“地産池消”が見直され

単に過去に戻るのではないこの試みに向けては、当然、地域の状況に応じた新技術の開発や地域単位の制度的枠組みが必要になるでしょう。具体的には、石油に代わり木質チップを燃焼させる「ペレットストーブ」。杉檜の皮を剥ぎしばらく放置すれば立ち枯れて軽くなり子供でも丸太を担いで運ぶことができる「皮むき間伐」などの技術が例に挙げられます。制度的枠組みについては、自治体ごとの新たな条例の制定や税制の工夫などが考えられます。

風土を生かす社会的仕組みづくりには、地域ごとに市民・企業・行政が一体となって主体的に地域と向き合う姿勢が不可欠です。地域の諸々の断ち切られたつながりを再生させるための手段として、地域資源（人材・もの）の活用を機軸としたコミュニティ・ビジネスの活用が有効であると考えます。

行政のみならずすべてが縦割りになりがちな地域社会を、まずは市民が主体となり、自らの地域を総合的にマネジメントしていく視点を持つのです。ここでいうマネジメントとは、潜在的な地域ニーズの掘り起こし、地域資源の発掘と活用、最適な環境づくり（景観デザインを含む）のコーディネートなどを指します。

そうした取り組みが、人々を元気にし、地域を魅力あるものに再生させていくことにつながるのではないかと思います。それは景観のみならず、雇用・福祉・教育・文化など様々な側面における地域再生になるはずで、景観が一瞬にして失われた東日本大震災から1年。新たな地域社会づくりを、東北を含め足元の地域から見直していく必要があると考えています。



大津波のあとも変わらず登る朝日  
(2011年7月、南三陸町)

ブックレビュー

『日本美の再発見』

ブルーノ・タウト著  
篠田英雄訳  
岩波新書初版 1939 年

タウト (1880-1938) は日本人に桂離宮の美を通して、日本の美を再発見してくれたことで有名である。ドイツ生まれの建築家であり、1933 年ナチス政権が確立された頃、ナチスに対立する思想的立場によって身の危険を知らされ、急遽スイスからモスクワ経由でシベリア鉄道によって日本に亡命してきた。

「すべてすぐれた機能をもつものは、同時にその外観もまたすぐれている」というのがタウトの一貫した哲学であるが、これは単に功利的で且つ有用性のみを重要視するという事ではない。彼は日本のあちこちをまわり、日本が持つ風土とそこに働き住んでいる人々と住まいとをじっくり観かつ考えた。この書で彼は先ず『日本建築の基礎』という論文で、当時のヨーロッパ人が日本から学びとったものが、「清楚、明澄、単純、簡浄、自然の素材に対する誠実等の理想化された観念」というものであったと

言う。そして、床の間を「文化、芸術および精神的な所産を置くべき定めのある場所として、世界に冠絶した創造である」と明言する。また、飛騨白川郷の家屋を「その構造が合理的であり論理的であり、ここに用いられている大工の論理が、総ての点でヨーロッパのそれと厳密に一致している」という指摘は先の機能と外観の関係を言い当てているといえよう。

次の『日本建築の世界的奇跡』の論文では「小堀遠州の芸術は、眼を思想への変圧器にする」と喝破し、いかに仏教建築からの離脱がその後の日本の美を決めたかを明示する。そして、この書には東北地方を限なく廻った記録が記載され、日本がもつ自然美の素晴らしさに詠嘆してやまない。さらに彼は日本の農業から生まれる農業文化の重要性を指摘し、日本人と農業文化の関係こそが日本の美の根幹を支えているという。

最後の『永遠なるもの』と言う論文で桂離宮を論じた後、彼は次のように述べている。「この国の近代的な発展や、近代的な力の赴く方向を考えると、日本が何かおそろしい禍に脅かされているような気がしてならない。」タウトの日本研究は豊饒であり、今後タウト研究が「景観から考えるまちづくり」に活用されることを願う次第である。(齊藤全彦)

VOICE

広島山里からこんにちは

安川久美子 (不動産コンサルタント)



景観とは「五感で感じるもの」であるという。

私は、昨年秋、自然に囲まれた生家に引っ越しました。季節ごとに移ろう美しい野山、田畑、小鳥たちのさえずり、風の音と香り、古くからの石州瓦の日本建築の家並み、人々の温かさ等々、まさに自然と歴史の息使いの中で一緒に息をしていることを全身で感じます。それは、心に安らぎと歓喜を無条件にもたらしてくれます。

しかし、そんな「トトロの森」のような山里の町も、近年は、歴史的な家屋の隣にプレハブ住宅、見苦しい電柱など、調和を欠く建造物等が突然変異した細胞のように現れています。視界に入ったとたん、身体の中に異物が混入したかのような不快を感じ、「心地いいトトロの森」からは放り出されてしまいます。もしかして、日本中から、「トトロの森」のが消失してしまったのでは?と心配になってきます。

私は思うのです。”日本流の近代化”と、”自由な土地利用”は、私たちの大切な守るべきものがあることに気づくことなく突き進んでしまったのだなあと。残念な思いがしていた中、「日本景観フォーラム」の皆様と出会い、日本人としての文化的アイデンティティをもつ私自身にも同時に出会えたような気がしました。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

「ジャンクな景観」に興味

山市香世 (株式会社ゼンリン)



埼玉県川越市生まれ。物心ついたころから地図が好きで、小江戸の町並みよりも、実は団地と送電鉄塔が原風景。中・高・大学と宇都宮で過ごし、大学時代は地理学を専攻。研究テーマは「三春市街地の景観と店舗看板」「宅地開発と街区公園整備の変遷」。この頃から都市景観に対する

関心は強く、景観の記録写真を撮り続けて今日に至る。ゼンリンに入社後は、住宅地図のメンテナンスやカーナビで利用される道路形状等のデータ収集に従事。現在はネット上や携帯端末で多く利用される無料の Web 地図サービスに対抗すべく、付加価値やビジネスモデルの企画にも携わっている。

最近の趣味は、旅行先でマンホール蓋の市章やご当地デザインを撮影すること。送電鉄塔やジャンクションといった工業的な構造物「ジャンクな景観」に興味を持つ。自然・文化的景観を損なうと危惧されることが多いが、それ自体を対象とした「路上観察」「ドボク・建築鑑賞」の愛好者によるブログや写真集などで注目され、見学イベントも増えている。多くのユーザーが簡単に写真やコメントをネットで発信し共有する昨今、景観の構成要素に多くの関心が集まるのが「地域の魅力再発見」につながることを期待している。

## これまでのいろいろ

## 沖縄感観光

スロームードがイイ！ 竹富島の景観

豊村 泰彦

沖縄に行って来た。沖縄と言っても那覇のある本島ではない。石垣島などがある八重山諸島の島々である。出発前に何人かの知り合いに「これから沖縄に行つて来ます」というと「何の目的で行くんですか？」「仕事？」と聞かれる。一昔前なら「沖縄に行く」と言えば「観光」に決まっていたのだが、今や沖縄は本島を中心に、外交やら政治やらビジネスやら背広着用人間の集まる最前線のようになっているためか、「沖縄に行つて来ます」などと簡単な挨拶では済まない。「そうですか、沖縄ね。遠いですよね。大変ですよ」と労いの言葉などをかけてくる。なので、「いやいや、これは遊びです。とにかく羽を伸ばしたいんで」などとは言えなくて、「いや、まあ、そう、ちょっと仕事、ちょっと遊び」などよく訳の分からない返答となる。

しかし、気にするのがおかしいのであり、この際、沖縄にゆく名目などは何でも良い。とにかく私は沖縄の石垣島、竹富島、西表島、その他2島を市場開拓を目指す熱血商社マンのようによく動き回って、離島地域の景観、地域コミュニティを観察したのであった。というのは嘘で、ほんとうは、だらだらと行き当たりばったりで歩き回り、疲れるとすぐ休息し、冷たいドリンクで喉を潤し、夜は、美味しい沖縄料理と泡盛の摂取によって脳も溶け出しそうな「沖縄ライフ」にしばし埋没したのであった。

前置きが長くなったが、今回、景観的に、まちづくり的に最も私を唸らせたのが竹富島である。竹富島へは、連絡船で15分。石垣島から対岸に見えるほど距離



牛車から眺めた白砂の道と珊瑚の塀

は近い。しかしながら、石垣島の港周辺がかなり都会化しているのに対して、竹富島はいまだに戦前の村のままで、

村の生活には琉球王朝時代の伝統が至る所に生き続けている。そんな時間超えの感覚が味わえるのもこの島の楽しみ方だ。沖縄の伝統的な家は赤瓦の屋根の木造家屋を石灰化した珊瑚の塀が連なり、それが集落を形成しているのが沖縄の伝統的な様式である。それが昔のままの形で残り、生活と一体になって伝統が維持されているのはお



集落の中央にある見晴台から竹富島の集落を眺める

そらく竹富島だけだろう。

竹富の集落に入ると、視界には白砂の歩道と珊瑚の塀。塀の中にはヤシやパパイヤ南方の植物が生い茂り、癒しモードというか、スロームードが充満し、海に入らないでも1日海水浴をしているようだ。さらにスローさを増幅させるのが集落の中を観光客を乗せて回る水牛車である。日本一遅い乗り物と言っていい、しかもこんなに絵になる乗り物はほかにない。このようなスローなリズムが竹富島のすべての時間と空間を司る原泉なのだろう。これを文化とせずしてなにを文化というのだ。世界遺産への登録申請の話が出ているが、日本では集落はまだ一つも世界遺産になっていないので、なつてほしい。ぜひなつてほしい。

もう一つ竹富島には面白い歴史がある。18世紀の琉球王国時代、竹富島に安里屋（あさどや）クヤマというは絶世の美女がいたそう。当時首里王府から派遣された役人の目差主が当時16歳のクヤマに一目惚れし、プロポーズするが、ひじ鉄を食らわしたところから始まる話が沖縄の民謡になっている。それが「安里屋ユンタ」で、沖縄民謡の中でもかなりポピュラーなので知っている人も多いと思う。三線（さんしん）で歌うのだが、これがいい。三線がほしくなった。

しかし、なにより、この島のリズムというがとにかくゆったりしているのが気に入った。「ものぐさ」「思考停止」「健忘」「緩慢」など東京生活の中では禁忌となっている所作もここではまったく普通のことだ。ようするにビジネスのムードが皆無なのだ。ようするに、竹富には仕事をしに来てはいけないのです。仕事をしたらければ、そこから15分の石垣島に行くべし。そして、仕事が終わったら即竹富に返ってくるべし。いいなあそんな生活、早くそうなりたいな。と思いつながら、東京に戻つてもしばらく思考停止状態が続いていた。

特定非営利活動法人 日本景観フォーラム

〒152-0011 東京都目黒区原町2-8-14-301

TEL 03-6802-7331 FAX 03-3793-9192

E-mail [info@keikan-forum.com](mailto:info@keikan-forum.com)URL: <http://keikan-forum.com/>